方言音声コーパスの韻律構造表示[1]
～鹿児島県立図書館方言採録テープの分析～
Prosodic Labeling of Dialect Speech Corpus
A preliminary study based on the Spontaneous Speech Database compiled by Kagoshima Prefectural Library

児玉望

KODAMA Nozomi

はじめに

鹿児島県立図書館は1987年に開設された「方言ライブラリ」でテープ録音された方言音声資料を公開している。1994年に刊行された『方言採録テープ目録』によれば、テープは市町村別に採録されており、当時の96市町村のうち85市町村に及ぶ地域の方言音声資料が、それぞれ一本以上のカセットテープとして所蔵されている。目録では、原則として、収録年月日、話し手（および聞き手）、対訳本の有無、内容の概略が記載され、市町村ごとの目録番号が付されている。収録年月日は1972年から1986年に及んでいる。話し手は、テープ全体が一人のもの、方言話者ではない聞き手によるインタビュー形式のもの、二人の方言話者による対談、老人会メンバーによる座談会形式などさまざまである。対訳本は、「鹿児島の方言　原稿用紙」と印字された統一的な規格の用紙に、方言（形）、共通（語形）の2行の組が1ページに8組ずつかな漢字交じりで手書きされている形式が標準である。複数のテープの対訳本が一冊に製本されている場合があり、テープと対訳本は一対一には対応しない。テープによっては、共通語形が別のテープに録音されているものもある。対訳本を欠いているテープや、対訳本のカナ音声転写が厳密ではないテープについては目録で注記されている。内容は、地域の民話、話し手（たち）の回顧談が多い。地域に関する思い出話が多いが、個人的な経験を主題とするものも含まれている。

鹿児島県立図書館方言ライブラリで公開されているこのテープ音声資料と対訳本を、鹿児島県立図書館と熊本大学総合図書館の図書館相互貸借制度によって貸し出して利用することができた。複写に関する制限事項は特になかったので、音声資料と対訳本を、共に私的利用のために複製した。本稿は、この複製資料の分析例を提示することにより、方言ライブラリ資料の学術的価値を報告し、またその研究利用のための環境整備やルール作りの必要性について説明することを意図するものである。貸し出した資料は、2009年度は川内

市（2-1）[現薩摩川内市]、枕崎市（4-1、4-2）、阿久根市（6-1）、出水市（8-7、8-8）、大口市（9-1）[現伊佐市]、加世田市（11-1）[現南さつま市]、西之表市（13-1、13-2）、鹿児島郡三島村(17-1)、同十島村宝島（18-1）、揖宿郡頴娃町（21-1、21-2）[現南九州市]、同開聞町(22-1)[現指宿市]、川辺郡笠沙町（23-1）[現南さつま市]、同坊津町（25-1）[現南さつま市]、同知覧町（26-1、26-2）[現南九州市]、薩摩郡上甑村（44-1）[現薩摩川内市]、同下甑村（45-1）[現薩摩川内市]、出水郡東町（49-1）[現長島町]、同長島町（50-1、50-2）、熊毛郡上屋久町（82-1, 82-2）[現屋久島町]、同屋久町（83-1、83-10、83-12）[現屋久島町]である。いずれも、鹿児島県の方言を本土方言系統（薩隅方言）と琉球方言系統（奄美・沖縄方言）に二分した場合に本土方言系統に属すると考えられる方言の資料である。本稿ではこのうち、薩摩地方の東シナ海に面した鹿児島県西海岸の諸方言を中心に、特に韻律構造についての分析例を提示する。

1　音声コーパスとしての鹿児島県立図書館方言ライブラリ

この県立図書館方言資料のもっとも大きな特徴は、ほぼ均一な世代（明治末から大正初頭生まれ）がほぼ同時代によく似た環境（同世代の同地域出身者との談話）で行なっていた言語使用の地理的変異が、一定の密度で記録されている、ということであろう。関心をもつ言語特徴によってはこの密度が粗すぎたり細かすぎたりする場合もあろうが、市町村域を超えて分布するような方言的特徴については貴重な資料となっているといってよい。たとえば、住田(1985)が佐賀県鹿島市方言、村上(2003)が熊本県松橋方言で報告した形容詞接続の未完了アスペクト形式（～ヨル）は、回想の発話が多い方言談話資料で頻出する。

(1) a.　ほんにうれひかいおした　（川内）「ほんとうにうれしいものでした」

　　b.　ゆかいごっがおおかいおんした　（阿久根）「愉快ごとが多いものでした」

　　c.　おとおしかごったいな（坊津）「おそろしいものだったよね」（V/A-ごっ）[2]

この形式の使用は世代差とみられ、動詞接続形式としてはヨルを使用する筆者の世代では、受動的な知識はあるものの、動詞接続の場合と異なり～テイル形で置き換えることのできない[3]この形式は、まず使用することがないといってよく、形容詞のカリ由来の連用形は促音便形に限られる。形容詞活用と動詞活用の近接という点では、尊敬語形の「いそがしかいやった（加世田）」も同じくこの世代の形式と言えそうである。また、1a.「おした」と 1b「おんした」は、アスペクト形式オッタに対応する丁寧形であるが、方言丁寧形が常用されているのも世代的特徴であるとみられる[4]。この丁寧活用接辞(/s/～/Ns/～/N/)は、語彙的丁寧動詞ゴワス、オジャス、助動詞モスなどの活用接辞に現れるほか、形容詞・助動

詞・一部補助動詞活用接辞(/r/～/Q/～ゼロ)の交替形として分布している地域があるとみられ、川内方言や阿久根方言もこのタイプに含まれる。これらの形容詞活用体系の全体像の記述やその地域差の分布と通時的形成過程の解明（たとえば、*モス＞(n)s の変化[5]を裏付けるような*フトカイモス形[＞フトカス]の実証）は、遠からず二次資料を含む文献に頼ることになろうが、方言ライブラリの仮名書きによる表記の不備は、実際に音声を伴なうことによって十分に補われており、一次資料として活用できるようなデジタル化や表記の標準化が必要になるだろう。

音韻特徴の音声録音資料としては、1930 年代以降、上村孝二氏らによって記録された鹿児島県各地の方言固有の分節音の特徴が、録音状態のいい資料ならまだかなり確認できる、という点でも重要であるが、テープ録音の音質にかなりばらつきがある中で、ほとんどの資料がアクセントやイントネーションといった韻律構造の資料としては十分に使用可能である、という点を強調したい。この地域のアクセント体系については 1930 年代以降、長島、出水・北薩（南肥後）、枕崎、薩南、甑島、屋久島各地、西之表、トカラと、地理的に比較的高密度な記述があるが、方言ライブラリは、トカラや頴娃町のような広域の自治体を除けばこれより高い密度で資料があって、提唱されている複数のアクセントタイプの中間に位置する方言についてもそのアクセントの実現形を確認することができる。さらに重要なのは、1950 年代に川上蓁氏が東京方言について句音調を提唱したのにはじまり、上野(1984)や Pierrehumbert and Beckman (1988)を経て、語より大きな構造の中での位置によってアクセントの実現形がどのように変わるかがアクセント研究や音韻記述の中心課題となりつつある中で、方言談話音声資料がこのような分析の一次資料になりうる、という点である。この地域の方言の多くは、先行研究によってすでに二型アクセントであることが知られているが、これらの豊富な先行研究の語あるいは文節の単独での発話の記述を手がかりにして、これらの語が異なる構造環境でどのように実現するかを観察し分析することにより、より充実した音韻記述が可能となる。また、これらのアクセント体系はすでに、奥村(1978)、添田(1996)、木部(2000)などで主として二拍語の語および文節でのアクセント型の推移モデルに基づく系統分類が試みられているが、音韻句に関する特徴の通時的変化と弁別特徴の通時的変化を区別することにより、より総合的な観点から、これらの体系同士、あるいは他の日本語方言アクセントとの系統関係を再考することができると考える。

2. 二型アクセントの韻律分析

東京方言の韻律構造の考え方には二通りある。川上蓁氏や上野善道氏は、語より大きい

韻律単位として句を立て、単独で発話された語や文節は同時に句でもあり句の標識と語の音韻特徴が共存していると考え、実現形の韻律特徴を句頭のみに現れる特徴と位置に関わらず実現する語に固有の特徴とに分析する。これに対して、郡史郎氏は単独での発話の音形を基準として、文脈での異なる実現を「アクセントの弱化」として記述する。Pierrehumbert and Beckman(1988)の分析は、語より大きい AP と iP をもつ構造階層を想定する点で前者と共通であるが、AP の実現形では無核型の語の後での境界声調削除、iP の実現形では最初の HL に後続する位置でのダウンステップ(!H)というプロセスを仮定しており、単独発話を含む句頭位置での語の実現形を基底とする点で後者に近い。前者でいう句の特徴が、句頭の語にのみ実現する、という場合には、どちらの分析でも記述的妥当性に差がない。

児玉(2008)と児玉(2009)では、前者の考え方で鹿児島市方言と出水市方言の韻律構造を分析したが、いずれの方言でも、郡史郎氏の「しみじみ調」イントネーションのような共時的分析に議論の余地のあるものを除けば、句の特徴は句頭の音韻語に実現すると分析しており、この点で東京方言と同様な異分析の可能性を残している。概略は、以下のようにまとめられる。

A. 音韻語固有の特徴（鹿児島市方言、出水市方言に共通。「文節」が音韻語として実現）

・ |....*F*| (A 型)

・ |....]| (B 型)

“F”は、最終音節が 2 モーラに分割される場合は 2 モーラ目、そうでなければ最終音節全体に実現するピッチ下降曲線、“]”は、句内に後続音節があればその冒頭に実現するがその音節の終わりまでには停止するピッチ下降である。これ以外の位置では有意味なピッチ下降はなく、ピッチは連続的に推移する。鹿児島市方言では、短開音節と短閉音節および一部の長開音節が 2 モーラに分割されないが、出水市方言では 2 モーラに分割されないのは短開音節のみであり、これらも句末イントネーションが加わって分割される場合がある。

B. 音韻句の特徴 {___ *F*/]|に実現する。

・ 鹿児島市方言{L*[H

最大 1 音節の H で終わる。この音節冒頭でピッチ上昇。先行部分は 0 個以上の L 音節の連続となる。（しみじみ調イントネーションでは H のみが句のすべての音韻語で繰り返され、最終語で最大になる。強調イントネーションでは L と H がともに卓立。）

・ 出水市方言{R+

卓立音節のない句頭からの上昇調。上昇終端の H がしみじみ調イントネーション（R+

が句内のすべての音韻語に及ぶ）と強調イントネーションでそれぞれ（句末の音韻語以外で）抑制／（句頭の音韻語で）卓立する。

しみじみ調イントネーション以外では音韻句の特徴は句頭の音韻語内で実現するので、AとBの二つの総和が単独の発話での語や（音韻語として独立しない付属語のみを含む）「文節」の実現となる。ピッチの上昇が音韻句のみの特徴であり、「しみじみ調」を除けば句頭以外の位置ではピッチが上昇しない、という点でも両方言は東京方言と似ている。音韻語数の多い長い句では、間にピッチ上昇が入らないまま各音韻語間でピッチが下降するため、句末のピッチは非常に低くなる。

児玉(2008)と児玉(2009)では、このような韻律分析の妥当性を確かめるために、それぞれ短い音声コーパスを作成し、この分析に従った解析と韻律ラベリングを試みた。同様な韻律構造解釈とラベリングが第三者作成の音声コーパスでも可能かどうか、また、可能である方言は地域的にどのように分布しているかを確かめるのが、鹿児島県立図書館方言ライブラリから談話録音テープを借りて複製した一つの動機である。

少なくとも音韻語と音韻句の特徴については上記の鹿児島市方言とほぼ同様な構造解釈が可能であると判断したのは、川内市高江、大口市、揖宿郡開聞町の資料である。このほか、枕崎市・坊津町・上屋久町楠川・屋久町尾の間で聞き手として登場し、姶良郡加治木町のテープでは目録に話し手としてクレジットされている新納教義鹿児島県立図書館長の発話も、同じ分析が可能である。このような一音節卓立型の音韻句を、薩隅方言主流の韻律構造とみなすことができるだろう。平山輝男氏が報告する、鹿児島県東部から宮崎県南部の尾高一型アクセントも同じタイプの音韻句であるとみなせば、南九州主流であると言ってもよいかもしれない。

特に卓立音節がなくゆるやかに上昇する音韻句をもつと分析される談話資料テープは、出水市のほか、阿久根市と（録音状態が悪いが）出水郡東町のものである。奥村(1978)で、B型2拍語に助詞を伴う3拍で2拍目に「中」、助詞に「高」と表記され、北薩摩でも東町（長島東部と獅子島）に分布するとされる「南肥後式」にほぼ相当すると考えられる。鹿児島式との違いは、音韻句のほかに、A型音韻語末で短閉音節が2モーラに分割されることであるが、この特徴も音韻句と相関すると判断される。

このほかの地域、つまり、薩摩半島南西部と島嶼部の談話資料は、明らかに上記の二つのタイプとは異なる韻律構造をもっている。文字転写された資料をみる限り、語彙や文法の点では主流地域と共通点が多いにも関わらず、テープで聞く音声で方言差が明確にわか

るのである。この違いが、音韻句の特徴によるものであるのか、あるいは音韻語の弁別特徴の変化によるものであるのかを分析し、それぞれの分析に応じた韻律ラベリング方式を考えてみる必要があろう。本稿では、これらの方言のうち主として、鹿児島県の西海岸沿いの地域のいくつかの方言の韻律構造分析を提示する。

各方言テープについて、以下の手順で分析を進めている。

① 頻出語や長い音韻語を中心に、そのピッチパターンの変異に着目して、音韻語としての特徴（不変部）と音韻句やイントネーションに関わる部分（可変部）に分析する。

② 短い音韻語に関する先行研究があれば、これとの整合性を考え、また、必要に応じてピッチ変動を分析して、全体としての韻律構造の仮説を立てる。

③ この仮説をある程度の長さをもつ方言音声資料に当てはめて韻律ラベリングを行い、その妥当性を検証し、問題があれば問題がなくなるまで仮説の修正と検証を繰り返す。

①で、頻出語だけでなく、特に、長い音韻語に着目するのは、音節数が長い場合の実現形がなければ性質を確定できない特徴があるからである。たとえば、出水方言音韻句の上昇調のような曲線声調連続を鹿児島方言音韻句の一音節卓立のような段階声調と区別するためには、3 音節以上のデータが必要である。この点、さまざまな音節構成をもつ長い語が比較的現われやすく、また、音韻句頭以外の位置に現われやすい機能語（助動詞や補助動詞）も丁寧接辞や敬語助動詞を伴って長くなることが多い談話音声コーパスは、韻律構造の分析のために貴重な資料であるといえる。③の韻律ラベリングの当面のゴールは、音韻句の境界と音韻語の境界を判定できるかどうかである。音韻句の区切りは唯一的に決定できるものではなく、原則として任意の音韻語境界に挿入できるので、ある区切りを別の区切りをより自然であるとする判定は、暗黙のうちに日本語の音韻句構成は方言の違いに関わらずおおむね共通であることを前提にしていることになる。この判断は、そうではないという明確な反例が現われるまでは有効であると考える。音韻語の境界、たとえば、どんな（構文論上の）付属語が音韻語として独立しどんな付属語が独立しないかは、鹿児島方言の範囲でも方言差がある。たとえば、長島方言では「～スル」は全体として統合するが、筆者の世代の鹿児島方言ではスルの前が 2 音節以上であれば音韻語境界が間に必ず現われる。このようなケースでは、一貫して音韻語境界がある、境界の有無の両方が可能である、一貫して音韻語境界がない、の 3 つの可能性があることに留意しておく必要がある。強調イントネーションや「しみじみ調」イントネーションの有無やその実現については、当面は、音韻句実現形の例外とみえる場合の説明として妥当かの検証に例外的に言及するにとどめ、正面からは取り扱わない。この種のイントネーションが自然な談話でどの程度

の頻度で現われるかについては実証データがほしいところである。

2.1. 長島町方言

鹿児島県北西部、北西側が天草下島南部、南東側が鹿児島県阿久根市に面する長島の西半分を占める長島町の方言である。話し手は、中央部の指江部落から2名、城川内部落から2名で、それぞれの対談の形式で録音されている。二つの集落の方言は韻律上の特徴を共有している。

先行研究としては、奥村(1978)の「長島式」、添田(1996)の「三角浦・長島式」に分類された二拍語分析がある。A型で、語単独・文節とも一拍目、B型で、語単独で2拍目、文節で助詞、つまり最終拍が高となる、とする。

音韻句の大きな特徴は、句頭からの高平調で、隣接する東町や阿久根市での上昇調とははっきり区別される。ピッチの急激な上昇が句頭の1音節内で完結し、このピッチが句頭音韻語の下降開始近くまで維持されるのである。句頭の音韻語がB型のときは音韻語全体が高平調となる。A型の場合は、句頭音韻語末の最大2音節が下降調を取り、それに先行する部分が高平調である。音韻句としての高平調は、句頭音韻語の範囲を超えることがないが、2語が1音韻語として統合（アクセントは二型アクセントの複合語規則に従って前分と同じになる）することが比較的多く、このため多音節にわたって継続する高平調が目立つ。

B型音韻語は鹿児島方言や出水方言と同様に|....]|のような、音韻語内全体で非下降の連続したピッチとなり、句頭以外の位置では音韻語境界ごとに順次ピッチが低くなる。これに対して、A型音韻語の末尾の下降調は、さまざまな要因で長さが変わる。

凡例：　{[(音節連続）　音節頭上昇(#[で卓越的上昇)と高平調　　]|(音節）音節頭下降
　　]|(音節）音節下降調　*]|(音節)*　音節第2モーラ下降調

{[ソイ]デ}「それで」　{[ゼン]ブ}「全部」　cf. {[ソイ]カ]ラ}「それから」

・ 2音節の音韻語では末音節のみが下降調が原則。ただし、頭音節が撥音に終わる閉音節で末音節が短い場合に頭音節後半が前半に比べてやや低く聞こえる場合がある。

{[オ]ドイ]ノ}～{[オ*]ドイ*]ノ}「踊りの」　{[オ]ドッ]テ}「踊って」

・ 3音節以上の音韻語の語末が短開音節であれば、次末音節から下降が開始する。

{#[オドイ]ノ}{#[ヒ]モ}「踊りの日も」

・ 強調イントネーションが加わると次末音節まで高平調が続く。

{[ドゲン]|オドイ]ガ|　「どんな踊りが～」

{[ハチンチガ]|オドイ]デ|　「八日が踊りで〜」

・　音韻句頭以外の語では末音節のみが下降する。

{[ダイ]タイ}　「だいたい」、{[ハジ]メッ}「はじめて」、{[マワ]イー}　「まわりに、交替で」

・　音韻句頭語の末音節が長音節や閉音節のときは末音節のみが下降調。

{フ]タイ}　「二人」

・　音韻句頭語の次末音節が無声のときは、末音節の第 2 モーラのみが下降調。

{リョ]カン]ノ}{[ナカ]|ジ]ダイ|　「旅館のない時代」

・　音韻句頭以外の音韻語では末長音節の第 2 モーラのみが下降する。

{#[ダイ]タイ}

・　強調イントネーションが加わると、音韻語末長音節の第 1 モーラまで高平調。

以上をまとめると、一貫して下降調なのは、出水方言の A 型と同じ条件で、音韻語末短開音節と 2 モーラから成る長音節の第 2 モーラだけであることがわかる。音韻語末短開音節に先行する次末音節や音韻語末長音節第 1 モーラで下降が開始することを、音韻句の A 型音韻語上での無標の実現形であると解釈すれば、出水方言（南肥後式）との違いは音韻句の特徴のみということになる。

A. 音韻語固有の特徴（「文節」が音韻語として実現）

・　|....*F*|　(A 型)

・　|....]|　(B 型)

B. 音韻句の特徴　{___ *F*|　〜{___]|に実現する。

・　{[H*<σ>

但し<σ>は音節またはモーラ境界にはじまる 1 音節以下の無指定部。強調イントネーションが加わると H が卓立し<σ>まで延びる。

この分析の要点は、A 型の単独発話で末尾に聞こえる 2 音節あるいは 2 モーラの「低」を、必ずしも実現しない前半を音韻句、一貫している後半を音韻語の特徴として区別する、ということである。高平調にはじまる音韻句が、無標のイントネーションでは末尾に 1 音節未満高平調を指定しない部分を持ち、この部分が A 型の下降に先立つと下降調（あるいは「低」）に聞こえる、と考える。実際、下降の幅は後半部が大きく、{[オ]ドイ]ノ}のような発音では 2 音節目のドイは、1 音節目よりは低いものの曲線声調としては非下降に聞こえる。B 型句頭音韻語の末音節でも、2 モーラ音節の後半部や、次に音韻句境界があり高

平調音節が後続する場合の短末音節でやや低く聞こえる場合があるが、A 型の場合ほどは一貫していない。音韻句の特徴（句音調）の実現形に、音韻語の型に条件付けられた変異形があると考え、この変異部分を可変長の<σ>であるとしておく。

以下に、テープ録音資料の一部（指江集落の対話の半ばから 4 分半程度）について、このような分析に従った韻律ラベリングを付けたカナ転写と対訳を掲載する。間投詞のイントネーションと句末イントネーションの表記は省略した。音韻句の境界は分かち書きで示した。

凡例：　[(音節)：音節頭での急激なピッチ上昇　#[(音節)：プロミネンス付与

](音節)：音節間下降。音韻句末では音節が下降調

](音節)：2 モーラ音節の 2 モーラ目の下降調。前に"[“があれば 1 モーラ目で上昇

下線部は母音無声化または無声摩擦音

マ　#[ミガケヤイ*]ジャー*　[ホ]ヤ　[ミン]ナ　[キビ<u>シ</u>カ]メ]ニ　[オオタドン]　[マ]タ　[ア]ノ　ナツ　[ナツオドイ*]ナン*]ダ　[オモシ]ロイ|コトモ]　[アイヨッタドンナ]

「ま　磨きあい（しごき）では　そりゃ　みんな　厳しい目に　遭ったけれど　また　あの　なつ．．夏踊りなどは　面白いことも　あったものだろうね（アイヨッタド＋ハンナ？）」

ハア　[モー]　[ボツ]ボ]ツ　[オドイノ*]ジュン*]ビ|ジャンスガ]　[/ナ　[ダイ]タイ　[ロクガツノ]　[ジューゴンチニ]　[オ*]ドイ*]ノ　[ダイガ]　[キ]マッ]テ　[/ナ　[ホイ]デ　[ブラクン]|シ]ガ　[ショーニン<u>シ</u>テ]　[ソイ]デ　[セーネンワ]　[ジュン]ビ]ニ　[カカイヨーテ]　[モー]　[イマゴロカラ]|ハンナ]　[ケイコ]|ヤッ]|タンデ]　[/ナー

「はあ　もう　ぼつぼつ　踊りの準備ですが　ね　だいたい　6 月の　15 日に　踊りの題が　決まって　ですね　それで　部落の人たちが　承認して（※サ変動詞が 1 音韻語化している場合が多い）　それで　青年は　準備に　かかりあって（※主語複数）　もう　今頃からアナタ　稽古なんですから　ねえ」

[ヤッパイ]　[ドゲン]|オドイ]ガ　[ミン]ナ　[<u>ス</u>キ]|ジャイヨッタケ]|/ナ　[キ*]ボー*]ワ　[ウカイヨッタケ]

「やっぱり　どんな踊りが　みんな　好きだったものかな　希望は　多かったものだっけ」

[マイトシャ]|ヤイドンカン] [/ソン [トシノ] [/ナー [/アン [カ]ク [シュー]イ]ノ [ブラクン]|シ]ノ [/ソン [オ]ドイ]ノ [ダイモクモ] [キ]イ]テ [キョーゲンガ] [ウカゴト] [アレバ] [キョーゲンナ] [ヤ]メ]テ [ボーオドイ]ト]カ [カネオドイ]ト]カ [/ナー [キョーゲンガ] [ナカゴタレバ]|キョーゲンノ]|ヤ]ロ|]チ
「毎年は（アレ）だけれども その 年の ね あの 各 周囲の 部落の人たちの その 踊りの 題目を 聞いて 狂言が 多いようで あれば 狂言は やめて 棒踊りとか 鉦踊りとか ね 狂言が ないようなら狂言をやろうって」

ホナ #[ホカンブラクト]ノ #[カネアイ]ヲ #[カンゲテ]|シヨッ]タッ|ジャン] [/ナ ヘエ [ソイ]デ [オマエタチントキモ] [/ソイ [キョーゲンオドイ]|ヤッタドッ]ガ [アッドンナ] [ドゲン]|ジャッタ] [ケ [ドケ]|シショ]ワ [タノンケ]|イッ]タ|]ト
「じゃあ ほかの部落（※一音韻語化）との 兼ね合いを 考えてしていたのです ですね へえ それで お前たちのときも それ 狂言踊りをやったときが あるだろうね どうだった かな どこへ師匠は 頼みに行った の（※この例では、準体助詞の「ト」が独立しているか）」

#[ソント]キャ [ハンナ] [ア]タイ]ガ [アマクサニ]|マエ]|シショ]ガ [イ]タッ|ジャッタイドン] [/ナー [ソノ]ト]キャ|モー] [ビョーキデ] [ヨワカ]|]チ|トコイ]デ ([/ナイ [シショ]ドン]ガ) [/ハイ
「そのときは あなた 私が 天草に前師匠が いたんだったけれども ですね そのときはもう 病気で 弱っているというところで」「なに 師匠さんが」「はい」

[ソイ]カ]ラ [ヒゴノ] [ツナ]ギ]ニ [ヨカ] [シ]ショ]ガ[/オッ|]チュ|ト]コイ [ナ] [ソケ] [イ]タッ|クッ]|]チ [ア]タイ]ガ [チョー]ド [セーネンノ] [カンブ]|シ|トッ]タ|モン]|ヤッデーカ] [カンブン]|シ]ガ [フ]ターイ [マダ] [/コン [カゴシマホン]シェン]モ [ゼン]ブ [カイツーサレト]ラン]デ [/ナー
「それから 肥後の 津奈木に いい 先生がいるというところに ですね そこに 行ってくるって 私が ちょうど 青年の 幹部をしていたものなので 幹部の連中が 二人 まだ この 鹿児島本線も 全部 開通されてないから ですね

[イズンカラ]　[サー]キ　[アユデ]|イキヨッ]タ|タイドンカラ]　[バ]シャ]ニ|ノッ]テ　[ミナマタ]マ]デ|デテ]　[/ナー　[ホイ]デ　#[ミナマタカラサ]キ　[アユデ]　[サンタロート]ゲー　[テソカッタ]|モン]|ヤッデガ]　[チョー]ド　[ニバントーゲントコイデ]　[ヤス]|ドッタ]ヤ　[ソー]ユー|ト/コイ　#[ヒコーキ]ガ|ヤッ]テ|クイ]|モン]　[/ナー　[ウエ]カ]ラ
出水から　先　歩んで（歩いて）行っていたのだけれども　馬車に乗って　水俣まで出てですね　それで　水俣から先は（※一音韻語化）　歩んで（歩いて）　三太郎峠へ　きつかった（疲れた）ものだから　ちょうど　二番峠のところで（※一音韻語化）　休んでいたら　そういうところへ　飛行機がやってくるもの　でしてね　上から

[ヒコー]キ]ワ　[メズラシカッタモン]|]ナ　[ソン]コ]ラ　([ジャッタロ])[ナイドコイジャ]|ネゴジン]　[ヒコー]キ]ヲ　[ユー]　[ミ]|/ト|トコイ]ヤ　#[マワラン]ド|]カ|ネ]　[コゲント/コイ]デ　[マ]ワッ]テ　[ミスレバ]　[ヨカイ]|テ　[ミユッ]|タイドン]|]カン　[マワラ]ジン　[ズーッ]ト　[ムコー]サン|イタン]デ　[/ナー　[ソイ]カ]ラ　[シショントコ]イー　[タンネ]　[イ]タ]テ
飛行機は　珍しかったもの（※一音韻語化）でね　その頃は」「そうだったろう」「何どころではなくて　飛行機を　よく　見てるところには　『まわらないだろうかね　こんなところで　まわって　みせれば　いいが』って　みているのだけれども　まわらないで　ずっと　向うに行きましたから　ですね　それから　師匠のところに（※一音韻語化）　訪ねて　行って

[ホイ]デ　[ハジ]メッ|ジャイモンデカ]　[ム/コー]モ　[タマガッ]|トッ]テ　[/ナー　[ホ]ヤ|モー]　#[ナガシ]マ|]チュトコレ]ニャ　#[ワタイ]モ|ハジ/メッ|ジャッ]|]チ　[ハジメ]テ]モ　[ナイモ]|ジャイドン]　[イタッ]ク]レ|ナラント]　[/ナー|チュ]テ
それで　はじめてですから　向うも　驚いていて　ですね　『それはもう　長島というところには　私もはじめてだ』って　『はじめても　何もですが　いらっしゃってくれ（ること）は（※一音韻語化）できないの　ですか』と言って

ハイ　[ソ]ヤ|モー]　[イキ]モス]ト|]チ　ホ]デ　[イキモン/デー]カ　[コンヤ]　#[ユックイ]|アス]ケ　[ト]マッ]テ|クイ/ヤン|]チュ|モンデ]　[ソイ]カ]ラ　[フタイ]ト]メ　[ト]マッ]テ　[ナ]　(ヘエ　#[トマッ]テ|キタト])　ハイ
『はい　それはもう　行きますん（で）』って　それで　『行きますから　今夜は　ゆっく

りあそこに　泊まってください』というものだから　それから　二人とも　泊まって　ですね」「へえ　泊まってきたの（※準体助詞トは従属）」「はい

[/ホー|セン]ナ|ハンナ]　[ヒモ]ドイ]ワ　[デケンデ]|]オ　(ウン　[ジャット]　[ジャット]　[ジャッドン]　[/ユー　マ　#[シショドンガ]テ　#[トマラセラッ]タ|モン]|ジャ]|]テ|オモテ]|ジャ])　[キャクジン]|ジャッデ]|ハンナ]　[タノンケ]|イ]タッ|ジャッデ]　[/ナー
そうしないとあなた　日戻りは　できないからよ」「うん　そうなんだ（※一音韻語化）　そうなんだ　だけど　よく　まあ　師匠さん方へ　泊まらせた（※三人称主語）ものだと思ってだ」「客人だからあなた　頼みに行ったんだから　ですね

[ソイ]デ　[ア]クー]ヒ　[モドッテキテ]　[ホーコ]ク]ヲ　#[シ]テー　[ソイ]カ]ラ　[ムコー]カ]ラ　[イッカノシュク]|]テ|ユ]タ|カ]ラ　#[ソント]キャ|モー]　[ミン]ナ　[ヨッ]テ　[ブラクン]|シ]モ　[ダイ]タイ　[/ナー　[ソイ]カ]ラ|モー]　[ヤクワイ]　[オ]ドイ]ノ　[ゲーダイヲ]　[ダイ]タイ　[ヨカトヲバ]　([キ]メ]テ　[ナ])　[キ]メ]テ　#[ソイカ]ラ　[ヤクワイ]　[ソイ]カ]ラ|ケーコ]
それで　あくる日　戻ってきて　報告を　して　それから　向うから　一過の宿と言ったから　そのときはもう　みんな　寄って　部落の連中も　だいたい　ですね　それからもう　役割　踊りの　芸題を　だいたい　いいのを」「決めて　ね」「決めて　それから　役割　それから稽古」

[ホイ]ト　[ヤクワイワ]|/ソン　[ブラクノ]　[オ]セン|シド]ガ　[ダイ]ド]ガ|ヨカロ]　[/コン|ヤクニワ]　[ダイ]ド]ガ|ヨカロ]|]チ　[イーヨッ]タッ|ジャロ]　[ホン]ニン]ノ　[キ]ボー]ジャ　[ナカッタッ]|ジャロ]
「そうすると　役割はその　部落の　大人の連中が　だれそれがいいだろう　この役には　だれそれがいいだろうって　言ってたんだろう　本人の　希望じゃ　なかったんだろう」

[イヤ]　[イヤ]　[ホ]ヤ|モー]　[ニンソーミ]タイ　[ナイシタイ]|シ]テ　ナ　[ブラクノ]|]マ　[ソー]ユー　[メン]ニ　[キノ]キー]タ|シ]ガ　[/ナー　[/コン|コ]ワ　[ナイガ]|ヨカロ]　[/コン|コ]ワ　[ナイガ]|ヨカロ]　[/コン|コ]ワ　#[オナゴガ]オ|ジャッデカ]　[オナゴヤ]ク]ガ|ヨカ]|]ガ|]テ
「いや　いや　それはもう　人相を見たり（※一音韻語化）　何したりして　ですね　部

落のまあ　そういう　面に　気の利いた（※一音韻語化）連中が　ですね　この子は　何がいいだろう　この子は　何がいいだろう　この子は　女顔だから　女役がいいよって」

2.2. 加世田市津貫方言

旧加世田市は吹上浜の最南部に位置するが、その内陸の南部、枕崎市に近い津貫集落の男女４名の録音である。昔の暮らしぶりに関する７つのテーマについて、一人が質問役で、残り３人のうちの一人が比較的長く答えるという形式になっており、対談というよりは短い語りである。全体で 25 分に満たない。

加世田市方言のアクセントについては特に目立った研究がないが、おそらく一音節卓立型の音韻句をもつ鹿児島市方言と同様のタイプとみなされているものと考えられる。この加世田市津貫のテープでも同様の卓立音節が認められる。しかし、鹿児島市方言と同じ体系であると解釈して聞くと、非常に奇妙な話し方に聞こえる。ゴワシ[タ]「でした」、サ変動詞の[シ]テ「して」、可能助動詞のナ[ラン]「できない」など、鹿児島市方言では強調イントネーションを伴わない限り音韻句句頭になることがなく、従って卓立音節が現われないような語でも、一貫して「高」の音調が聞かれるのである。鹿児島市方言では音韻語数の多い長い音韻句の終わりはピッチがかなり低くなるが、この津貫のテープでは、句末に下降調イントネーションがない限り、全体としてピッチが高止まりして下がってこないように聞こえる。もちろん、音韻句への分割はすべての音韻語境界で可能ではあるから、読本スタイルなど一音韻語が常に一音韻句で実現するような発話もありえないことではないが、しかし、4 名の話し手が一貫してこの種の発話をしているので、これが加世田市津貫方言アクセントの通常の実現形として分析すべきであろう。

一つの解釈は、この方言の音韻句はピッチによってはマークされず、各音韻語のアクセントは音韻句内の位置に関わらず常に同じになる、というものである。この場合、各型のピッチの実現はすべて音韻語の特徴、ということになる。少なくとも、鹿児島方言では音韻句の特徴であったピッチ上昇は、音韻語側の特徴であると見なさなければならない。では、音韻句の境界を見分ける（聞き分ける）ことができるようなピッチ上の特徴はないのだろうか。この点に留意して、praat を用いたピッチ分析を参照しながら、発話の各部分を丁寧に聞いてみると、「高」よりむしろ「低」に重要な特徴があることがわかる。

もっとも際立つのは、鹿児島方言の L*[H に対応する部分の L の大きさによる違いである。津貫方言の場合は、発話をポーズで区切った場合、ピッチの最低点が冒頭になる場合が多い。音韻語の音節数が多い場合には、この L は低い水準を上昇開始まで維持する。音

節数の小さい音韻語（A 型で 2 音節以下、B 型で 1 音節以下）では L（低平音節）がなくなるが、冒頭の[H は低く始まる鋭い上昇調であることが多い。たとえば、[マー]タ|バン]ニャ 「また晩には」の延伸された冒頭音節（高平に聞こえる）の開始ピッチは、バンニャの最後のピッチよりも低い。これに対して、L の大きさが十分ではない（つまり音韻句の句頭でないと分析できる）音韻語では、L*[H の部分が全体として上昇調になっていて、[H の卓立がピッチ曲線上ははっきりしないものが多い。[H はむしろ、上昇曲線の勾配が急になっていて、平調から上昇調への転換となっていると解釈できそうである。このような上昇調の[H 音節(R 音節)に続く A 型の下降音節が長い場合、ピッチのピークはこの 1 モーラ目となり、注意して聞くと聴覚上もこの第 1 モーラのほうが[H よりも高く聞こえる。

音韻句冒頭でのこの L の卓立に関連して、音韻語末の下降（鹿児島方言では A 型で下降調の *F*|、B 型では音節間下降]|）にも特徴がある。加世田市津貫方言で音韻句の句頭以外の音韻語の冒頭で L が目立たないのは、先行音韻語末での下降が不十分だからである。これは、下降の開始のタイミングが遅いことに原因が求められる。[H のピッチ上昇が、後続の音節の冒頭まで継続するのである。このため、A 型末音節が短開音節の場合には、鹿児島市方言で予想される「低」よりかなり高い位置で下降が止まって聞こえるし、長音節の場合はその第 1 モーラの「高」がはっきりと聞き取れる場合がある。B 型末音節の”]|”の下降の遅延は、次の音韻語の冒頭音節に 1 音節以内の「高」を作り出し、3 音節以上の音韻語であればこの音韻句頭以外の位置に限って「重起伏」、つまり、2 箇所の「高」をもつ音調となる。2 音節以下の短い語では下降調から上昇調へのピッチの折り返しは聞き取れず、ピッチ上昇が短縮されるために全体としてピッチが上がりきらず、前の語と比べて全体が下降しているように聞こえる。たとえば、～[ムン|ゴワシ[タ　「ものでした」の[ムンは、最後の[タよりも低い。

以上のような観察に基づいて、加世田市津貫方言の韻律特徴を音韻語と音韻句のものに分析する。要点は、鹿児島市方言の H を音韻句ではなく音韻語の特徴（音韻句内の位置に関わらず実現する特徴）とし、かつ、下降開始の遅延を原則として音節内部での下降として表現することである。児玉(2009)で、非下降と下降の二つの曲線声調が連続する音節を 2 モーラと呼ぶことにし、短音節でも 2 モーラになりうるとする分析を提案したが、この用語法を用いれば、加世田市津貫方言の遅延した下降をもつ音節は、長さに関わらず 2 モーラ音節と扱い”*F*”で表記できる。

A. 音韻語固有の特徴（「文節」が音韻語として実現）

・　|....R*F*|　(A 型)

・ |....R|(*F*) (B 型)

F は 2 モーラの後半の下降調。先行する R は音韻句冒頭では 1 音節と 1 モーラが標準であるが、A 型 1 音節音韻句では 1 モーラのみ。音韻句冒頭以外の位置では上昇開始位置が固定せず、一貫しているのは下降開始直前が H になることだけである。B 型音韻語が連続し、後分が 1 音節の場合は、*F* の下降は 1 モーラ目で完結し *FR* のような声調となる。

B. 音韻句の特徴 {___R に実現する。

・ {]L*[

L*は 0 個以上の低平調音節。[は、後続する R の左端での急激なピッチ上昇。A 型 1 音節音韻語([*RF*)以外で R は高平調（[H）に近づく。

この解釈の妥当性を確かめるために、加世田市方言採録テープの音声データの一部（第 4 部：昔の食生活）に実際に当てはめてみたものを以下に掲げる。聞き手が男性 1 名、答えているのは女性 2 名である。句音調境界の"{ }"は省略し、冒頭の L を"]"で表記する。R は"["で示し、音韻句頭では R の開始位置、それ以外ではピッチのピークの現われる音節（最終音節）の前に表記した。*F* の音節は斜字体で表記する。A 型と B 型の弁別をより明確にするため、A 型末音節の下降調は音節の前に斜字体の"*]*"を付した。

]ホン[*ナ]ラ*]ム[*カ]シャ*]サカナ[*ヤ]モ*]ホ[トン*]ド*|ナカッ[タ|*]ト*|ゴ[ワン|*]ガ*]ド[ゲン|シ*]テ*|コ[ゲ*]ナ*|タベ[モン*]ノ*][テー|*イレオッ[ス]ロ|]カイ* [*]ナ

「それでは　昔は　魚屋も　ほとんどなかったのですが　どのようにしてこんな食べ物を手に入れていたのでしょうか　ね」

]ム[*カ]シャ*]ナイ[モ]ゴザハンジャシタ[ヤ]クイノハマ[*カ]ラ*]カンメ[ウイ|チュ[*]ガ*|キ[テ [*]ナ*]ア[サ|ハ[ヨ|*オ*キッ[チェ|キ[テ][ア]ノ]ミサオバサン[ヤ*]ラ*]ダイオバサン[ヤ*]ラ*|[*]チ*]アタマ[ニ|*カンメ*[テ|キ[テ]ヒボカシジャ[ラ]スボタンイオヤ[ラ]ヨカサカナ[ワ|コ[*]テ*]タモ[ヤ|*ナ*[ラン|*タン*[デ|*ソ]ラ*][*]アン*][ソ]ゲン|トヲ[*]バ*|コ[*]チェ*]ソマズ[シ|[*]チュ[*]ヲ*|シ[*]テ*|タ[モッ|[ムン|ゴワシ[タ|[*]ト*

「昔は　何も　ありませんでしたから　久志の浜から　被り売りというのが来て　ね　朝早く起きてきて　あの　みさおばさんや　誰おばさんやって　頭に載せて来て　火ぼかしや　スボタや　いい魚は買って　食べられないんですからそりゃ　あの　そんなのを買って　蕎麦雑炊というのを作って食べるものでしたの

][/ソイ][/ソン]ヒボカシュ[バ|ツンクエ[/テ|イレ[/テ][ソイ]ガ]オイ[シー|[ムン|ゴワシ[タ][ソシ]テ]マクラザ[キ]ベーラ[ヲ]マッ[ケ]テ]イノ[テ|イタ[/テ|[/ナ][/アン]カゴ[ハ]メ|イタ[/テ]カゴハマ[カ]ラ]イ[ワヒ]ドン][コ]テ|キ[テ][ソ]ゲン|トヲ[/バ]ヒボケ[タイ]シオツ[ケイ|シ[/タイ|シ[/テ]タ[モッ|[ムン|ゴワシ[タ|[/ト][ソ]ラ
それ　その　火ぼかしをつまみほぐして入れて　それが　おいしいものでした　そして枕崎に　薪を　束ねて　担いでいって　ね　あの　鹿篭浜に行って　鹿篭浜から　鰯でも買ってきて　そんなのを　火ぼかし（にし）たり　塩漬けにしたりして　食べるものでしたの　そりゃ」

]ム[カ]シャ]ヤセ[モ]イッネン[ジュ]ナカッ[タ|ワ[ケ|ジャン[ガ]イ[ケン|コ[ツ|シオヤッ[ス]ロ|[/カイ ナ
「昔は　野菜も　一年中　なかったわけですが　どんなことをしていらっしゃったでしょうか　ね」

]ム[カ]シャ|[モー]ソノトキソノ[ト]キ]ジキジキ[ダ]ケ|アッ[テ]イマン[ゴッ][イッ]ショー]イチネン[ジュー]ヤセ[ガ|タ[エン|[/チュ|コッ[モ]ナカッ[タ|タン[デ|ソ[/ラ]ジ[キ]ノ|ト[キ][ダ]ケ]ダイコンジキ[ワ|ダイ[コン]ナイノジキ[ワ|[ナイ]カボチャンジ[キ]ワ|カ[ボ]チャ|[/チ]ソ[ゲ]ナ|[モン|ゴワシタ[ヤ][ア]ノ]ダイコンノジキ[ワ]ネ[ワ]キイデコン[ニ|キッ[チェ][ハ]ワ]ホイナ[ニ|シ]セ][ソ]ゲン][ト]ヲ|タベ[/タイ|シオシ[/タ|[/ト
「昔はもう　そのときそのときに　時期時期にだけあって　今のように　一生　一年中野菜が絶えないということも　なかったのですからそりゃ　時期のときに　だけ　大根の時期（※一音韻語化）は大根　何の時期は何　かぼちゃの時期はかぼちゃって　そんなもんでしたから　あの　大根の時期は　根は　切り大根に切って　葉は　干し菜にして　そんな　のを食べたりしていましたの

][ソシ]テ]カライモンカ[ネ|チュ[/ヲ|トッ[チェ]カライモヲ[バ|タケオロヒ[/ジェ|オレ[テ]ソ[レ]ヲ]ミ[ズ]ジェ][コシ]テ][ア]ノ]カ[ネ]ニ|シ[/テ]ソ[ユ]バ][ア]ノ]ミズ[ジェ]エ|アワセ[テ|オツユノナ[ケ|イレ[/タイ|シ[/テ]ソ[ゲ]ナ|ムン[モ|タ[モッ|[ムン|ゴワシ[タ

そして　「薩摩芋のカネ」(※一音韻語）というのを取って　薩摩芋を竹おろしでおろして　それを　水で　漉して　あの　カネ（澱粉）にして　それを　あの　水で合わせておつゆの中に入れたりして　そんなものも食べるものでした」

]ソン[ナ]ラ　]ム[カ]シャ　]ゲ[ナ|ムン[ノ　]クオシツ[ロ|[]カイ|[]ナ]ヒ[トッ　][カ]タイ|ミ[ヤッ|タム[ハン|[]カ
「それでは　昔は　どんなものを　食べていたでしょうか　ね　ひとつ　語ってみてください　ませんか」

][モー　]ム[カイ]ノ|コツ[ワ　][]ナー　]オカシカームン[ノ　]タムゴッ[タ　]クゴッ[タ|[]トー　]ガッ[ツ　]ア[サ|ハ[ヨー|オキッ[チェ　]ワ[ガ　]テギ[ネン|ミ[ソ　]ムグヲ[バ　]チ[チェ　]ソイ[ヲ]バ　]ハンパヒ[ラッ|シシェ[]テ　][ソシ]シェ　][マ]タ　]クサ[キイ|イ[]タッ|キ[チェ　]ヨメ[ジョ]ワ　]ヨ[メ]ワ　]クサ[キイ|イ[]タッ|キ[チェ　]タキア[ゲ]チェ　]タムッ[チェ　]ナマダッキョー[ヲ|タタッシ[テ　]ミソ[ヲ|ツンマメ[]タイ|シ[]テ|タムッ[チェ　][ア]ン　]シオシ[タ|[]ガ|[]ナ
「もう　昔のことは　ねえ　おかしなものを　食べていた　食っていたの　すっかり　朝早く起きて　自分の　手杵の味噌　麦を　搗いて　それを　半端開きにしておいて　そして　また　草切りに行ってきて　嫁女は　嫁は　草切りに行ってきて　炊き上げて　食べて　生らっきょうを叩きにして　味噌をまぶしたりして食べて　あの　していましたよね

]ヒル[イ]ナ　#]マーコ[テ|ナマヌッ[ケ　]カライモ[ノ　]フワフ[ワ|シ[]タ　]ンモ[ナ]カ|カライモ[ヲ　]ロッガッ[ノ|コロ[]ズイ　]サ[スッ|[トッ|チャッ[チェ　][ソ]ユ|ムシッ[]チェ　]ポカ[ポ]カ|シ[]タ　]ンモ[ナ]カ|カライモ[ヲ|タムッ[チェ　][ヒ]ヲ|ク[]ライ|[ムン|ゴワシ[タ|[]ト
昼飯には　ほんとに暑いのに　薩摩芋の　ふわふわした　美味くない薩摩芋を　六月の頃まで　とりあえずとってあって　それをむしって　ぽかぽかした　美味くない薩摩芋を食べて　日を暮らすものでしたの

][マー]タ|バン[]ニャー　]ソマズ[シ|チュ[]テ　]デコン[ノ|キイタクッ[テ　]ヒボカ[ス|ツンクエ[]チェ|イレ[]テ|[]ナ　]タムイゴシ[タ|[]ト　]カライモ[ワ　]ユルイノフ[トッ　]アブッ[チェ　][ソイ]ヲ　]タモ[ラン|ヤ[]チャ　]ク[ワン|ヤ[]チャ　]ハ[ヨー|ネ]ロ|[]ド|チュ[]テ|

オ[ヤン|[/サ　][ユ]チ|[/ナ　]メバンメ[バン　]ソマズン[シ|ジャ[ラー|コ[/ラ|[/チ　]コ[ド]マー　][ク]ツ|フクラ[/カイ|[モン|ゴワシ[タ|[/ト　]ソ[ゲ]ナ|モン[ノ|ク[チェ　　][ク]ラヒ|[モン|ゴワシ[タ|[/ト

また晩は　蕎麦雑炊と言って　大根を切り刻んで　火ぼかしをつまみほぐして入れてね食べていましたの　薩摩芋は　囲炉裏いっぱいに　炙って　それを　食べないやつは「食わないやつは　早く寝ろよ」と言って　親たちが　言ってね　毎晩毎晩　蕎麦雑炊だわこりゃって　子供は　口をふくらせるものでしたの　そんなものを食って　暮らすものでしたの」

]ム[カ]シャ　]ガッ[コン　]ベン[ト]ワ　]ゲ[ナ|モン[ノ|モッ[テ|[/イッ|[モン|ゴワシ[タ|[/ケ　][/ナ

「昔は　学校の　弁当は　どんなものを持って行くものでしたっけ　ね」

]ム[カ]シャ　][モ　][/ナー　]ドッナ[ムン]ナ]ゴザハン[ジ　]コ[メ|ツ[/モ　]アン[マイ　]ゴザハン[ジ　]コメ[ヤ　フ[タ]スッ|ミ[/スッ|イレ[/チェ　]アワヤ[ラ　]カライモヤ[ラ　]ドーッ[タイ　]カライモ[ヲ　]キイゴダクッ[テ|イレ[/チェ|[/ナー　]オカヒ[カー|ニギイメ[/ス|モッ[チェ|[/イッ|[モン|ゴワシ[タ|[/ト　]ヨゴレハン[ケ]チー|ツツン[デ　]ブラ[ブ]ラ|シ[/チェ

「昔は　もう　ねえ　ろくな物は　ありませんで　米というのも　あんまり　ありませんで　米は　二粒三粒入れて　粟や　薩摩芋や　どっさり　薩摩芋を　切り刻んで入れてねおかしな握り飯を持って行くものでしたの　汚れハンカチに包んで　ぶらぶらして」

2.3. 薩摩半島南西部諸方言の「重起伏」

薩摩半島南部には、九州方言学会(1991)で上村孝二氏が「重起伏式」と呼ぶ、音韻語内で HLH のピッチ配列が観察されることで知られる（坊津、久志、笠沙、枕崎、頴娃、開聞、喜入）[6]。木部(2000)が枕崎市内の 6 地点で重起伏に一音節卓立型や平板型など 3 種を観察していることからも分かるように、比較的変化が起きやすい部分であると考えられるが、加世田市近隣の地域（頴娃町、枕崎市、笠沙町、坊津町）の方言の韻律構造は、重起伏のない加世田市と同様な（音韻語に「高」=R をもつ）韻律構造に、音韻句冒頭に L ではなく H が加わったことによる重起伏として分析できる可能性がある。

方言ライブラリでの頴娃町、笠沙町、坊津町の方言採録テープ音声は、全体としてのピ

ッチが高止まりしていて、音韻語数の多い音韻句でもピッチが下がりにくいという加世田市のものの性質を共有している。さらに、音韻句冒頭での1音節分の高平調がA型・B型に関わらず出現するのに対し、音韻句冒頭とは考えにくい位置での重起伏（音韻語冒頭音節の高平調）が、B型音韻語に後続する位置のみで現れる。たとえば、坊津町の次のような例である。

(2) [ミ]ズ|クン[]ダイ　[フ]ロ[ヲ|ワ/ケ[]タイ　　「水を汲んだり風呂を沸かしたり」

2.では、ミズがA型、フロヲがB型であるが、B型末音節のヲは上昇調で次の音韻語冒頭のワまで引き続きピッチが上昇し、次のケで急にピッチが下がってから再びピッチが上昇する。二つの動詞は共にA型で、長末音節は前半モーラでピッチのピークに達して第2モーラではっきりと下降調となる。A型末音節が短い場合は、やはり2モーラ化して遅延した下降調となるが、下降がはっきりと聞き取れない場合は、単に後続の音節との間にピッチの段階声調差があるように感じられる場合もある。このようなピッチ推移は、以下のような、加世田市方言とほぼ同様なRをもつ音韻語の弁別特徴を仮定し、音韻句頭に一音節以下の高平調と組み合わせることで説明できる。

A. 音韻語固有の特徴（「文節」が音韻語として実現）

・ |....R*F*| ～ (音韻語末音節が1モーラの場合) |....RLv]| (A型)

・ |....R|(*F*) ～（後続音韻語頭音節が1モーラの場合）|....R|(Lv])　(B型)

B. 音韻句の特徴　{___Rに実現する。

・ {[H]...（～　一音節音韻語の前で {[　）

句頭の高平調音節は、長い音韻語でも1音節に限る。加世田市の]L*[と異なりRの長さを指定せず、2音節のA型音韻語では、Rは1モーラまで圧縮されて「音調の谷」を形成する。1音節音韻語では、Rと融合して音節前部での急な上昇調となる。

頴娃町、笠沙町[7]、坊津町の方言データの韻律は、おおむねこのような構造を想定すれば解釈できそうなピッチ推移となっている。木部(2000)の枕崎市の一部の「語頭一音節卓立の重起伏」も、音韻句の特徴であると解釈できればこれとほぼ同じ体系を想定できる。Rが1音節以上の「高」で実現すれば「鹿児島式アクセント」、ピッチのピークがA型末音節やB型後続語頭音節にずれれば「枕崎式アクセント」となる。

Uwano (2007)で記述された、句頭からの高平調に引き続き、A型次末から「低」と下降調音節、B型末に「中」をもつ枕崎市のアクセントや、この「下降調」を「高」、「中」を「低」と記述しているとみられる木部(2000)の「平板型重起伏」をもつ枕崎市街地のアクセントは、加世田市方言に仮定した韻律構造の音韻句の特徴を[H*](0個以上の高平調音節)

に置き換えたもののR音節の実現が、音節末まで上昇が遅延されたと考えれば説明がつく。

・ *{[H*]R*F*| ～ *{[H*]RLv]| (A型) > {[H*]L[*F*]| ～ {[H*]L[Lv]|　二段観{[H*]L[H]|

・ *{[H*]R|(*F*) ～ *{[H*]R|Lv] (B型) > {[H*]M[|*F* ～{[H*]M[|Lv]　二段観{[H*]L[|

B'. 音韻句の特徴　{__R に実現する。Rは"["として実現。

・ {[H*(])< σ +>[

句頭の高平調音節連続は、長い音韻語では右端でゆるやかな下降調になることが多く、1音節以上可変長の高平調無指定の音節連続< σ +>を設定しておく。A型2音節語（例：ゴゴ「午後」）のように[Hが1音節の場合は上昇調を取るが、後続の音節間上昇とは傾斜が異なり、「音調の谷」のような聴覚印象がある。1音節音韻語では、Rと融合して音節前部での急な上昇調となる。

音韻句初頭以外の位置の音韻語も上昇調で実現するので、音韻語両型の一貫した特徴としては坊津町などの1音節卓立型重起伏と同じRを含むものを指定しておく必要がある。しかし、音韻句の特徴としての急激なピッチ上昇"["と比べるとこの上昇幅は小さく、枕崎市方言ではピッチの高止まりの印象は弱い。"["の現れない位置での型の弁別は、音韻語間のピッチの急な下降(A型)と後続音韻語冒頭音節に及ぶ緩やかな下降(B型)によって実現していると考えられる。重起伏の二つの"["のうち、冒頭の上昇はそれほど目立たない。これにしたがって、間の下降も音韻語が長いほど緩やかであり、後続する急な上昇が際立つ。

枕崎市方言採録テープにこの分析を当てはめたものを例示する。枕崎市の方言採録テープは、「漁民のことば」と「東鹿篭のことば」の2種があり、それぞれ2名ずつの男性の話し手と枕崎市立図書館長、鹿児島県立図書館長の対話形式であるが、例示したのは「漁民のことば」である。

凡例：　[（音節）：音節冒頭の急なピッチ上昇　/：音韻句冒頭高平調の終わり

]|：A型音韻語末の段階下降（先行斜字体は明瞭な下降調）。

[|：B型音韻語末。音韻語境界を越えて上昇下降（斜字体音節）。先行部微上昇R。

（下線部は母音が無声あるいは無声摩擦音）

[アクイア/サ[ガ]|マタ]　[アン]　[ジューニ　[イチガ/ツ[ノ]　[ジューニン/チ　/ノ[　[ゴ/[ゴ]|シチジゴロ]|ジャシタ[|ド]　[ジューサン/チ[ノ]　[ゴ/[ゼン]　[ジュージゴ/ロ[ガ]　[イッ/バン[　[キ/ツー[|ゴワシタ[|ヨ]

「あくる朝がまた　あの　十二・・　一月の　十二日・・の　午後七時ごろでしたよ　十三日の　午前　十時ごろが　一番　きつうございました（きつかったです）よ

[カイ/ガン[ガ]|ユワ[|ナカ[|モン[|ジャロ[|カイ] [カイ/ガン[ガ] [カイガン/セン[ニ]|ニゲタ[|ホーガ]|ユワ[|ナカロ[|カイ]|チ] [カイ/ガン[ニ]|イタッ]|ゴワシタ[[ジダ/ガ[|ワルッ]|チュ]ド]|テ] [イロン/ナ[|デマガ] [ゴワシタ/デ[|ヲ]
海岸がよくはないものだろうか　海岸が　海岸線に逃げたほうがよくはなかろうかって　海岸に行ったのでした　地面が割れるぞって　いろんなデマが　ありましたからね」

[アタイ/[ゲ] [オ/ヤモ[[ナン/カ[[シェシカ/ナイ[カ] [コー/[テ] [カタ/ゲッ[[モドイオッタ/ラ[|ナー] [ソ/[ノ] [アイ/[ガ]|コン] [ユラユラ/ユ[ラッ]|チ]|ソン] [ア/ルッ[|カタデ]|ソゲン]|シタ]|チ]
「私の家の　親も　何か　せし（※「鯨の肉の油を抜き塩漬けにしたもの」）か何か　買って　担いで　戻っていたらですね　その　あれがこの　ゆらゆらゆらって　その　歩くところでそのようにした（なった）って」

[タッ[|チョイヤ] [ナ/ラン[|モン[|ゴワシタドン[|ナー]
「立っていることは　できないものでしたけどね」

[アルイ/テ[[カエイゴッタ/ヤ[[ソン] [ユラユラ/ユ[ラッ]|チ]|シテ] [コー] [ハン/ト[クッ]|チ]|シタ]|チ] [ソシコバッ/カイ[[ソン] [ヒドカッ/タ[|チ] [カ/タッ[テ]|ユッカスイ]|モン[|ゴワシタ[|ド] [ナー]
「歩いて　帰っていたら　その　ゆらゆらゆらっとして　こう　転ぼうとしたって　それほどばかり　その　ひどかったって　語って言い聞かせるものでしたよ　ね」

[モー[[ソイ/[カイ] [ナ] [イッシューカン/バッ[カイ]|シモシタヤ] [ナ] [サクラジ/マ[デ] [ソ/[ノ] [ジシン/ノ[|タメ]|ゴワシタ[|コダ] [ナ] [ソ/[ノ] [イロン/ナ[|サカナガ] [ナ] [フット/カ[|サカナガ] [ズーッ]|ト]|ヤッ/パイ[[シオ/ニ[|ノッテ] [ナ] [ナガ/レッ[|キモシテ[[ヤ/ドン[|シタ]|ダイズイ] [ヤッ/パイ[[シン/[ダ]|ノガ] [ウ/カン[デ] [チョイ/[チョイ] [ミイ[|ムン[|ゴワシタ[
「もう　それから　ですね　一週間ばかりしましたら　ですね　桜島で　その　地震のためでしただろう（※最後の形態は未詳）　ですね　その　いろんな魚が　ですね　大きな魚が　ずっと　やっぱり　潮に乗って　ですね　流れてきまして　家の下あたりまで　や

っぱり　死んだのが　浮かんで　ちょくちょく　見るものでした

[ソシ[テ]　[サクラジ/マ[ノ]　[アン]　[シロ/ガ[　[シロズ/ナ[|ゴワス[|カ]　[アン]　[ハイ/[ガ]　[ナ]　[モー[　[ナ/[ゴー]　[ヤッ/パイ[　[フッ[|チョンシタ]　[ド]　[カワ/ラガ[|ミエン[　[ミエング/ライ[　[ナ]
そして　桜島の　あの　白い　白砂ですか　あの　灰が　ですね　もう　長く　やっぱり　降ってました　よ　瓦が見えない　見えないぐらい　ですね

2.4. 島嶼部方言概観

まだ分析手順の③まで完了していないものが多いが、現段階で注目すべきだと考える点について簡単にふれておく。

2.4.1. 「3 段下降」方言

長島町方言は、冒頭から高平調の音韻句を持ち、無標の音韻句句頭の短音節に終わる A 型音韻語がこの高平調と、末尾 2 音節の下降調から成っており、段階声調としては 3 段階の高さが区別される方言であった。この 3 段階は、長島方言では音韻句頭の A 型音韻語に限られ、他の位置では 2 段階になる。このような、A 型音韻語内での 3 段階の下降が聞かれる方言は、このほかに、屋久島の諸方言（確認した範囲では上屋久町楠川、屋久町安房里、尾之間）とトカラ列島十島村宝島の方言がある。ただし、これらの方言では、冒頭高平調（あるいは上昇調）は高々2 音節という長さの制限があり、5 音節以上の長い A 型音韻語では 3 段階の 2 段目のピッチが平板に長く続き、最後の音節で下降調となる。(例：ゴ[ム]ター]ビ～ゴ[ム]タービオ]バ 「ゴム足袋(を)」[8]楠川）東京方言の古い頭高発音での「明治天皇」や「大神宮」で最終モーラでの下降に先立ってに非下降部分が現われるのと似ている。屋久島の方言は平山(1967)をはじめ鹿児島方言と異なり助詞付加によるアクセントの移動がないという記述が多いが、A 型の場合は 3 段階の最初の下降にのみに注目して、2 回目の下降となる音韻語（文節）最終音節の下降調に気がついていないのではないかという疑いが拭えない。屋久町栗生の談話資料では、2 名の話し手のうちの 1 名は 3 段下降が例外的にしか現われない。1 名は 3 段下降がかなり規則的に現われる。2 名に共通しているのは、2 短音節からなる A 型音韻語（「この」「その」など）で 2 音節目の下降が遅く、2 モーラ化している印象を与えることである[9]。平山(1967)が「崩壊一型のアクセントで型知覚がない」とする宝島方言のテープでは、型所属の固定があるかどうかはともかくとして、3 段下降の A 型（的）音韻語と、末音節卓立の B 型（的）音韻語の 2 種類が音韻句頭に認

められる。前者は 2 音節の場合は屋久島栗生のような末音節 2 モーラ化の印象がある。

長島方言では 3 段のうち上の 2 段が A 型音韻語に実現する音韻句の特徴と分析したが、屋久島でも同様の分析ができるかどうかは、なお検討を要する。長島方言と同様な、末音節（あるいはその一部）だけの下降調で実現する語も多いが、やや低い位置で冒頭 2 音節と 3 音節目の間に下降が聞かれる発話も含まれている方言がある。このような発話が音韻句の冒頭音韻語と解釈できるかどうかは、全文解釈が終わるまで結論を待ちたい。

屋久島の諸方言で問題があるのは、B 型音韻語上へ実現する音韻句の特徴の解釈である。長島方言では A 型音韻語の場合と同様に冒頭からの高平調という解釈が可能であるが、屋久島の諸方言では、B 型の場合に低起の上昇調が現われる方言が多い。その場合でも、高平調の発話が混じる場合があり、さらに、このような高平調の発話で B 型音韻語の語末音節がやや低くなる発話も聞かれる。上昇調と高平調の選択にイントネーションが関与する可能性もあるが、これも全文解釈の必要がある。

このような屋久島諸方言の音韻句の実現のありかたは、二型アクセントの歴史の解明にとっても重要な示唆があると考える[10]。一つは、A 型と B 型で音韻句の特徴が異なり、上野(1984)が仮定したような、型の弁別とは独立した単一の「句音調」ではない、という点である。上野(1984)では、同様な問題を高起式と低起式をもつ京阪方言について指摘している。おそらくは音韻語の型の弁別と比べて変化しやすい領域である音韻句の特徴の通時的変化は再構がむずかしいと考えられるが、その中で、音韻句の実現が型によって異なるかどうかが比較的変化しにくい特徴であるとすれば、九州での二型アクセントの分化以前からの特徴の残存ということになるかもしれない。また、屋久島諸方言の A 型音韻句の冒頭 2 音節の高は、上野(1988)で二型アクセント A 型の祖形として「下降式」を継承するものとして提案されている音形を想起させる。この A 型音韻語冒頭 2 音節の「高」は、他の二型アクセント方言では坂口(2001)に記述されている長崎市方言のアクセントとも共通であり、屋久島諸方言の保守的な特徴のひとつと数えられる可能性がある。ただし、注意が必要なのは、屋久島諸方言でも A 型音韻語の弁別特徴（音韻句内での位置に関わらず観察される特徴）には他の薩隅方言の A 型音韻語同様、音韻語末の一音節以内の下降調が含まれる可能性が強く、この場合、仮定される変化は音韻句の実現に関するものだけであるという点である。長崎県や天草など、九州の他の地域の二型アクセント体系においても、特に 2 音節以上の「低」の分布とその曲線声調に留意してアクセント実現を音韻句境界表示に関わるものと音韻語の型表示に関わるものとに分析し、その上で、そのそれぞれについてあらためて比較言語学的分析をする必要があろう[11]。

2.4.2 「重起伏」方言

甑島の「重起伏」アクセントは、上村(1941)で全集落調査の結果が報告されたものであり、また、上野(1984)では、第2音節への非弁別的な高音調付与の例として掲げられ、「句音調」である可能性が言及されている。鹿児島県立図書館方言採録テープにある当時の4村の音声資料のうち、今のところ上甑村（中甑集落・浜）と下甑村（手打）のみを貸し出して分析を開始している。ある程度の長さの音韻語では、上甑村のものでは冒頭2音節、下甑村では冒頭1音節の[Hの後でピッチが下降し、音韻語末A型でHLまたはH]、B型でLHが現れる重起伏音調である。いずれの方言も、冒頭の[H]、音韻語末のHL, LHが共に音韻語に音韻句内の位置に関わらず一貫して現われるため、ピッチが高止まりしている印象を強く与える資料である。音韻句のマーカーである可能性があるのは、最初の[Hに続くピッチ下降の幅である。つまり、句頭の音韻語ではピッチが大きく下降し、音韻語末のHL, LHが（特に長い音韻語で）低く実現するものの、次の語ではまたピッチが回復して、次の音韻句まで全体として句頭と同じ高い水準でピッチが推移する、という構造のようで、聴覚印象は薩摩半島南西部のそれとはだいぶん異なっている。「重起伏」で音韻語の両端の境界を表示する構造といえるかもしれない。

屋久島北西の三島村方言テープは前半部が女性2名、後半部が男性1名を話し手としてのインタビューである。目録では前半は黒島の大里集落、後半が片泊集落とされているが、前半・後半とも竹島が話題になっており、話し手が生え抜きでない可能性がある。黒島大里方言[12]についてはUwano(2007)に記述と音韻解釈が掲載されており、A型で冒頭HLに続く[H、B型で音韻語末LHに先行するH]をもつ重起伏方言となっているが、県立図書館資料の2名の女性の発話では、A型だけでなくB型でも音韻句冒頭の位置でHL〜H]が現れ、長いB型音韻語は三段階（ただし、3段目は下降ではなく上昇調）のピッチを行き来する音調となっている。音韻句冒頭以外の位置では、重起伏は現れず、音韻語末音節での非上昇(A型)、上昇(B型)で型の弁別が維持されているように聞こえる。片泊の資料では重起伏は聞かれず、音韻句冒頭のA型音韻語は[H*F、B型音韻語はL*[H]で現われる。冒頭以外の位置ではA型の末音節の2モーラ分割を含め出水方言とほぼ同様で、音韻語ごとにピッチが下降する。平山(1967)では片泊方言のアクセント体系が大里より新しいと断じているが、屋久島諸方言と同様、A型とB型で異なる音韻句境界表示となっている点に注意が必要であろうと考える。大里方言の音韻句表示は、一旦区別を失ってから二次的に区別が発生したという解釈も可能である。いずれにしても、同じ島でありながら二つの集落の方言は、音韻句境界表示の点で大きく異なっている。

3. 韻律分析と音声コーパス

鹿児島県西部と周辺の島嶼地域はアクセントの変異の報告が比較的多い地域である。それに見合うような密度で談話音声資料が存在し公開されており、これらの報告されたアクセント形が実際の発話の中でどのように実現しているかを確かめることができるというのは、アクセント研究にとって実に幸運なことであると考える。本稿で主として取り上げた鹿児島県本土側の方言の音韻句と音韻語の実現の分析にもいくつか重要な知見を与える。

鹿児島県本土側に限れば、音韻語、つまりアクセント型の実現の弁別体系は、2 種類しかない。鹿児島市方言、出水市方言、長島町方言のような、A 型が末音節内部での下降調、B 型が音韻句内部の音韻語境界でのピッチ下降によって弁別される体系と、加世田市や薩摩半島南西部の重起伏方言にみられる、A 型音韻語末でのピッチ昇降に対して、B 型音韻語の次の語との境界をまたいだピッチ昇降が弁別される体系である。これ以外のアクセントの変異は基本的に音韻句の境界表示の違い、つまり、ピッチ上昇のタイミングがもっとも遅い末音節卓立タイプ、ピッチが低から高へ推移する上昇調タイプ、冒頭でピッチが上昇する高平調タイプ、冒頭で上昇したピッチが緩やかに下降するタイプ、冒頭での高音調が固定長の持続の後低い段階に移行するタイプ、音韻語特徴としてのピッチ上昇に先立つ低平調連続といった、音韻句冒頭部の音節連続にかかる曲線声調の違いによっている。鹿児島県本土の方言では、冒頭部の音韻語の型の区別に関わらず同じタイプの曲線声調が音韻句の境界表示に関わっている。このような非弁別的な特徴が型の弁別体系より変化しやすいことは、この地域でのアクセント変異のあり方からも実証される。

語単独のアクセント調査では見逃されやすいが、談話コーパスでは比較的容易に確かめることができる音韻現象としては、薩摩半島南西部にみられる音韻語境界をまたいだ弁別特徴の実現があげられる。たとえば、加世田市方言アクセントは語単独の調査ではおそらく鹿児島市方言と同じと分析されるだろう。東京方言アクセントの平板型と尾高型の弁別がこの種の現象ではよく知られている[13]が、東京式や京阪式以外での報告は少ない。管見では佐藤(2005)で報告された小林市の尾高 1 型アクセントの音韻語境界を挟んだ「高」音調の連続がこれに近い。佐藤氏はこの音韻語境界に音韻句の境界を設定するが、むしろ音韻句冒頭音韻語末にはじまる高が次の（音韻句境界に隔てられない）音韻語の頭音節まで持続するという分析のほうが、他の方言でのフォーカス音調との並行性を保てるのではないかと考える。この場合は、語単位のアクセント調査で見逃される音韻句の特徴ということになろう。音韻句の特徴が句内の複数の音韻語にわたって実現するとすれば、句音調の有無は「アクセントの弱化」というような単純なモデルでは処理できない現象となろう。

音韻句のよりよい理解のために談話コーパスによる音韻句の分析はきわめて重要であると考える。

言語記述のゴールは、コーパスのような一回性のパロールのデータが与えられたとき、その背後にあると考えられる言語の構造を過不足なく読み取って説明できる段階に到達することにある。分節音レベルでの分析がカナ転写に留まる段階で韻律構造のみを音声コーパスから読み取ろうとするのは順序を誤った蛮勇であったかもしれない。しかし、言語の音韻記述はまだ、何を記述すべきなのかが十分に明らかでない段階にあるように思われる。その十分でない部分を見極めるために実際の発話をじっくりと聞いて作業仮説をたて、それを公開して批判を待つという方法を選択した。

したがって、本来は分析データと共に元になる音声データを参照用に公開することが望ましいのであるが、テープの形で公開されているものとはいえ、自分のものではない音声データのデジタル公開にはまだ未解決の問題が多い。著作権法上の問題や個人情報の保護[14]に関わる問題にじゅうぶん留意した上で、このような論文出版や口頭発表の機会ごとに方言採録テープの学術的価値を説明し、学術利用の範囲として利用許諾を得られる条件について鹿児島県立図書館と合意できるよう努力したいと考えている。

鹿児島県立図書館方言採録テープと同様な日本語音声資料がほかにどれだけあるかはわからないが、このような過去の音声資料が、我々のみならず次世代以降の研究者にとっても重要な資産であることを痛感する。現有の音声資料をデジタル化して集積し、最低限の検索性を確保できるような情報を付加した上で共有できる仕組みを考えていくことも、個々の研究者の責務と捉えるべき時代かもしれない。

注

(1) 本研究は科研費（課題番号 2152041100）の助成を受けたものである。

(2) 九州方言学会(1991)の後藤和彦氏による山川町岡児ヶ水方言形容詞活用記述では、連用形にガィとガの 2 形を立て、アスペクト助動詞オッと丁寧形容詞モスをガへの承接形式とする。

(3) アスペクト形式「ありよる」の置換形とみられる「あっている」は、鹿児島方言だけでなく九州一円で広く聞かれる。

(4) 筆者の世代では丁寧形式は共通語形（デスマス形）に置き換えられている。児玉(2008)の音声参考資料として提示した方言落語(http://lg.let.kumamoto-u.ac.jp/prosody/yopparai.html)でも丁寧形式（俥屋及び、妻の俥屋との会話）はデスマス体である。

(5) この分析の早いものとしては原田(1934)がある。この論文では類推変化の可能性も示唆している。

(6) 開聞町方言採録テープでは確認できず。喜入町テープは未聴。九州方言学会(1991)の山川町岡児ヶ水方言の詳述で、後藤和彦氏は重起伏を少年層に顕著な特徴としており、長寿記念品配布時の個別訪問時に町内各地で採録された開聞町資料でこれが聞かれないのは、世代差による可能性がある。ただし、後藤氏の記述では、山川町のそれは鹿児島市型の韻律構造（音韻句）冒頭に H が現れるもので、本稿で扱うものとは必ずしも連続とはみなされない。

(7) 笠沙町片浦方言(23-1)のテープとその対訳は、『方言採録テープ目録』の記述とは異なり、上村孝二氏の編で 1968 年 3 月に国立国語研究所はなしことば研究室から発行された「方言録音シリーズ 3」と題される刊行物であり、他の対訳本と異なり、ローマ字音韻表記付きでタイプ打ちされ、上村氏による注や短い解説がついている。氏は、戦前の調査では重起伏調であったものが割に鹿児島式化していて、枕崎式の話し手が混在しているという主旨の説明を加えているが、この観察には賛同しかねる。

(8) A+B>A の複合語と解釈。ほかに「杉山」「旗色」（尾之間）など助詞付きで同様の下降が聞かれる。

(9) 添田(1996)では、栗生式として 2 拍語後部に下降調とみられる表記を付している。

(10) 奥村(1978)と木部(2000)は、二拍語の単独実現形の解釈からこれらの方言を二型アクセントの祖形に近い形とし、添田(1996)はそれぞれ革新形と解釈する。

(11) 方言音声資料ではないが、故・伊藤明彦氏が取材した証言を集めた「被爆者の声」（同名ホームページでも公開）で聞かれる二型アクセントの談話では、長い音韻語での屋久島のような三段階下降は確認できなかった。

(12) 児玉(2009)p23 の「大島黒里方言」は、「黒島大里方言」の誤記である。

(13) 川上蓁(1953)参照。

(14) 国立国語研究所の「全国方言談話データベース」では、文字データ化された部分は紙媒体・CD-ROM 共に話者名や個人名が伏せられている。

参考文献

上村孝二(1941)「甑島方言のアクセント」初出『音声学協会会報』65・66〔井上史雄他(1999)編『九州方言考』ゆまに書房. 5.-217-221.〕

上野善道(1984)「新潟県村上方言のアクセント」『金田一春彦博士古稀記念論文集』2 (言語学篇) 東京：明治書院. 347-390.

上野善道(1988)「下降式アクセントの意味するもの」『東京大学言語学論集'88』:35-73

上野善道(2003)「書評：木部暢子著『西南部九州二型アクセントの研究』」『国語学』212: 74-84.

Uwano, Zendo(2007) “Two-pattern accent systems in three Japanese dialects”, In Riad, Tomas and

Carlos Gussenhoven (eds.) *Tones and tunes. Volume 1: Typological studies in word and sentence prosody*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter. 147-165.

奥村三雄(1978)「九州諸方言アクセントの系譜」『九州文化史研究所紀要』23. 55-79.

川上蓁(1953)「「花高し」と「鼻高し」ー東京アクセント段階観の限界」『音声学会会報』82.6-9.

川上蓁(1956)「文頭のイントネーション」『国語学』25:21-30.

川上蓁(1957)「準アクセントについて」『国語研究』7:44-60.

木部暢子(2000)『西南部九州二型アクセントの研究』勉誠出版.

木之下正雄(1953)「鹿児島県出水方言におけるアクセント節について」『国語学』15:70-80.

九州方言学会(1991)『九州方言の基礎的研究』風間書房.

郡史郎（1997a)「「当時の村山首相」の 2 つの意味と 2 つの読み:名詞句の意味構造とアクセント弱化について」『文法と音声』くろしお出版.123-146.

郡史郎（1997b)「日本語のイントネーション –型と機能–」『日本語音声[2] アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』三省堂.169-202.

児玉望(2005)「鹿児島タイプ二型アクセントの音調句」『熊本大学言語学論集４』281-307.

児玉望(2007)「音調句と日本語韻律構造」『熊本大学言語学論集６』1-22.

児玉望(2008)「曲線音調と日本語韻律構造」『熊本大学言語学論集７』1-40.

児玉望(2009)「出水方言のモーラ声調単位とイントネーション」『熊本大学言語学論集８』1-26.

坂口至(2001)「長崎方言のアクセント」『音声研究』5.33-41.

佐藤久美子(2005)「諸県(もろかた)方言における「一型アクセント」の実現についてーフォーカスとの関わりに注目してー」日本言語学会第 131 回大会口頭発表

住田幾子(1985)「九州方言における「カリ活用」の現況」『日本文学研究』21.177-186.

添田建治郎(1996)『日本語アクセント史の諸問題』武蔵野書院.

早田輝洋(1999)『音調のタイポロジー』東京：大修館書店.

原田芳起(1934)「鹿児島方言の敬語法に就きて」初出『方言』4-3〔井上史雄他(1999)編『九州方言考』ゆまに書房. 5.91-113.〕

平山輝男(1967)「トカラ群島・屋久島・種子島の方言」『国語学』69.82-103.

村上智美(2003)「形容詞のパラダイムー熊本県松橋方言の場合」『方言における動詞の文法的カテゴリーの類型論的研究　No.3（西日本編)』(科学研究費成果報告書)

Pierrehumbert, Janet & Beckman, M.E. (1988). *Japanese Tone Structure*. Cambridge.